

諸君。おはようございます。みんなでいい修了式を作ろうという心構えが感じられて大変よいですね。さて、修了式です。そこでここではそれにふさわしく「終わり」について考えて見ようと思います。先生方も含めてみんなで考えたいと思います。

その前に確認ですが、「ある」と「ない」は違いますよね。「ある」は「ある」で「ない」は「ない」。これはよろしいですか。それでは「終わり」を考えて見ましょう。例えば音楽がまさに終わろうとしている瞬間、この時音楽は「ある」ののだろうか。それとも「ない」ののだろうか。もし「ある」のなら音楽はまだ終わっていないし、「ない」のならすでに終わっています。そうすると「終わり」とは「ある」のでも「ない」のでもなく、「ある」でもあり「ない」でもある。また「ある」と「ない」が一つでありながら「ある」と「ない」が区別されている、そういうものだということになる。これは大変矛盾していますね。私はいったい何を言っているのだろうか???状態になります。要するに「終わり」とは「語れないもの」ということになりそうです。「語れないもの」というのも言葉ですけれども。

「終わり」についてはもう一つききたいことがあります。先程の例で言うと、音楽が途中でぶちっと終るのと、ちゃんと終わるのとはどこが違うんだろう。つまり「終わり」と中断の違いです。誰か説明してくれるかな。

「終わり」というのはどこまでも分からないものだから、今から言うのは一つの考えに過ぎないけれど、「終わり」はそれがそこから始まった「始め」に結びつくことによって自らが「終わり」であることを証しするのだと思います。音楽でも第 4 楽章の終わりが第 1 楽章の出だしに通じている。小説でも最後まで読むと、書き出しがどうしてああでなければならなかったのか、そうして終わりがどうしてこうでなければならぬかが分かる。映画でもラストシーンというのがありますね。つまり「終わり」が「始め」に結びつくことによって、「終わり」は真に「終わり」となり、「始め」は真に「始め」になる。

ところで「終わり」が「始め」に結びつくことによってそこに一つの円ができます。完結ということ。閉じられるということです。ですが「閉じる」ということはつねに「開く」と対です。「閉じる」ということですので「開かれて」しまっています。ドイツ語で完結、閉じることを **Schluss** といいます。これに「絶つ」という意味の **ent** をつけて、完結を絶って開くこと、**Entschluss** が「決心」という意味になります。何かが完結し、真に終わることで人間はおのずと開かれて別の始まりに向けての決心を行うことができます。それはこれまでのことを引きずることなく、きっぱりとなされます。

ここで自然の出来事に目を向けてみましょう。四季には春夏秋冬とありますが、どれが「始まり」でしょう。ハイ、そこの方。そうそう、あなた。

—「どれが始まりとも言えません。」

そうですね。同じように蕾の終わりが花の始まり、花の終わりが実の始まり、実の終わ

りが種の始まり、というように一見そこに「終わり」と「始まり」があるように見えますが、そこにあるのはただの変化と繰り返しだけです。生と死も然りです。どこかで明確な線引きができるわけではなく、死は常に新たな生の連環の中に入っていきます。さてそこで質問です。このように自然には「終わり」と「始まり」がありませんが、なぜ人間だけが終わりと始めを見るのでしょうか。W先生、質問の意図が分かりましたでしょうか。

「はい。僕にもわかりましたので、大丈夫だと思います。」

A：僕、話してもいいですか？

—もちろんですよ。

A：人間はほかの動物と違って言葉をもっていて、コミュニケーションが他の動物と比べ物にならないほどに豊かだと思います。死や別れも知っていて、だから終わりが分かるんだと思います。

拍手

—拍手。とてもいいですね。まずは受け入れる。だけどそこからは、まず相手の発言の核心を捉える。そこから問いを立てる。そこを心がけてみよう。今の発言にはいろいろな要素があったね。まず人間が言葉を持っていて、それで豊かなコミュニケーションをとっていること、別れや死を知っている、ということ。ほかに意見のある人？

B：人間も自然で連続しているけど、人間が始めと終わりを知っているのは区切りを作るからだだと思います。

拍手

—また拍手。でもそこで終わらせてはいけない。今の発言に対しては当然、何故人間は区切りを作るのか、という問いが出てくる。どうして区切りを作るの？

B：人生が長いから・・・

—なるほど。先生方の中で何か意見はありませんか。

C：私も B さんの意見に賛成です。区切りを作ることで何かを目指すこともできれば、自分を振り返って評価することもできます。

生徒：おお～〈納得〉

D が元気よく手を挙げる。

—はい。君。

D：えーと。人間は死や別れを知っていて・・・

—いいよ。頑張れ。

D：えーと。(言葉が出てこず、苦しそう)

—ありがとう。いいよ。また言葉が出てきたら教えてくださいね。

さて、もちろんこんな問いに正解はありません。それで例えばこんな風にも考えられるでしょう。A君が言ったように人間は言葉を持っている。言葉は分ける性質をもっています。分けることのできないものを分ける。春夏秋冬、とかね。そうすると春の終わり夏の始めということになる。終わりと始めが出てくる。

あるいは人間の意志が結果という終わりを目的として始めに持つという性質を持っているから、とも考えられる。言っていることが分かるかな。例えば水を飲む場合でも、水を飲んでいる自分をイメージして、行動はそっちの方から起る。キャッチボールをする場合でも、相手が受け取った状態をイメージして、そこから行動が起ってくる。何かを話す場合も、始めから話す内容がはっきりしているわけではないけど、何か言いたいことが予めあって、それにぴったりした言葉を与えることで、結果何が言いたかったかが分かる、こんな具合だ。つまり人間の意志の構造が終りと始めを見るようにできているわけだ。こうなると「区切りをつける」ことの大切さが分かる。

また人間が死や別れを知っている、ということもあるだろう。動物には多分それがない。

ですがここで私は人間が終わりと始めを見るのは、人間が物語を必要とするからだ、ということを考えてみたい。始めと終わりのあるのが物語だ。人間はその物語の中で意味づけを行うことができる（C先生の評価と同じですね）。しかしさらにその根本を考えないといけない。何故人間が意味づけを必要とするかといえば、人間がその根底に意味づけのできないもの、無意味に出会っているからだ、ということになる。だから人間は意味づけのできないもの、無意味に耐えきれずに物語を語るのである。

君たちも我慢のできないつらい経験をしたとき、これは試練だ、と思いませんか。それは物語です。あるいはこれは運命だ、宿命だ、と考えませんか。それも十分物語です。しかしそれは意味づけのできないものに出会って辛い、と言っていることの裏返しだ。

物語は人間の本来的なあり方から出発して最後にそこに帰る、という形をとることが多い。人間の本来的な在り方、これは分からないのだけれども、それを幸福な在り方だと考えるなら、最後はハッピーエンドを考えることになる。例えばキリスト教では人間は樂園から追放されて、最後はまた神のもとに帰る、とされている。あるいは歴史観でもそうしたハッピーエンドを考えるものもある。あるいはまったく逆に人間は無から生まれ、無に帰っていくという考え方もできる。そうすると結末は悲劇的になる。しかしいずれにしても物語することで人間が意味づけを行っていることに変わりはない。しかしその根本には人間が意味づけのできないものに出会っている、ということがある。

もちろん日常的な始まりや終わりの中には単なる繰り返ししかありません。これを習慣といいます。食事も習慣的にとる。そのうち何を食べたか分からなくなる。さらに行くと食べたことすら忘れてしまう。習慣への埋没、これが日常の本性だ。しかしそうした習慣を破り、人生観の根柢を揺るがすものとして「終わり」が経験される瞬間がある。その時に人間はその出来事に耐え切れずにそれを物語ろうとする。その中で語りつくすことのできない「終わり」を見ようとするのです。しかしそれは同時にどこまでも意味づけのできないもの、最初に言った「語りえないもの」に出会っていることの裏返しに他なりません。「語りえないものとの出会い」、これが経験の深さであり、それを物語ろうとすること、そこに言葉の深さがあります。

そうして十分に語りえた時、先ほど申しましたように人間はその完結を破って、自然と次の一步を歩み始めることができるのです。

さて、諸君。諸君はこの修了式でどのような「終わり」に触れましたか。

それでは「終わり」ます。